

# この苦しみを子どもたちにもたちらに二度と体験させてはならない 原発や核燃施設を一日でも早く止めよう

武藤北斗

3月11日14時46分、僕は仙台にいました。地震が多い地域なので多少の事では驚きませんが、大きく長い揺れにただならぬ危機感を感じ急いで会社のある石巻へ向かいました。

消えた信号や、崩れかけた家に驚き、渋滞する車の列で強烈な余震に何度も襲われ、

まずは家族（石巻市の隣の東松島市）の無事を確認することに。三陸自動車道も閉鎖され、5時すぎに帰宅。会社は翌日早朝にでも確認に行こうと思っていました。まさか会社が津波に襲われ



石巻市を襲った津波。武藤さんの父親が撮影

ているとは知る由もありませんでした。

夜になって徐々に情報が入りだした頃、仙台に出ていた母が何とか帰宅し、父はどこかで避難しているとはばかり思っていました。しかし夜中の2時すぎ、

毛布で寒さを凌いでいる僕らに驚くべき情報が届きました。父が会社の屋根に避難し、今も救助を待っている。僕は言葉にならない絶望感を感じ、最悪の状況も覚悟しました。

## 原発が爆発しても大丈夫!?

翌日になっても情報が入らず、何をすればいいのか分らないそんな時、更に僕らを絶望のどん底へ突き落とす情報がラジオから流れました。「福島原発の建屋が爆発」。信じられませんでした。まさかこの時代に日本で原発が・・・。

ラジオからは「爆発しても影響なし」「放射能が漏れても影響なし」、挙句の果てに「マスコミと政府の発表以外のデマにまどわされるな」との報道。この時ばかりは怒りよりも先に恐怖に襲われたのをはつきりと覚えています。その恐怖に押しつぶされそうになりながらも、「原発が爆発しても大丈夫???」そんなはずはない」と覚悟しま

した。

家には9歳の長男、6歳の長女、そして生後3か月の二男がいます。過剰な反応といわれるかもしれないですが、急いでガムテープで目張りをし、空気を遮断した部屋を作りました。家中の食料と水を集め食料部屋を作り、家の出入りは裏の勝手口を使い、そこに繋がるキッチンを外出着に着替える場所となりました。

その夜、なんと自力で脱出した父が戻ってきましたが、会社は全壊し、雪の中屋根で過ごした事により肉体的・精神的疲労で疲れ果てていました。家族全員の無事で安堵したものの、翌日からは自宅での避難生活が始まりました。「放射能の影響はない」という推進派の言葉ばかりを取り上げるマスコミと政府の言葉では、子どもを外出させる気にはなれませんでした。

電気・ガス・水道は通じないため、飲み水も極力節約しました。腐りそうなものも無理して食べず、胃が大きくなることを防ぎ、のどが渇くような食べ物

は後回しにしました。真剣に1カ月間の避難生活も想像し、生き抜くために知恵を振り絞りました。給水車が来た時などは、放射能防護の重装備で私がかけてました。

## 子どものために避難を決意

公園や道では避難生活に疲れた子どもや大人が遊んでいました。雪に喜ぶ子どもたち。放射能の事を考え複雑な気持ちで通り過ぎました。実は震災後にも近所の方に放射能の危険性について話しましたが、マスコミの「デマに惑わされないように」という言葉の影響か、真剣に受けとめてもらうことはできませんでした。この頃には不安と恐怖が怒りに変わりはじめていました。これほどの重大事故を起こしてもまだ「安全」を言い張る。これが原発立地市町村への対応かと思うと、あらためて原子力推進者たちの無責任な言葉が頭をいっぱい埋め尽くしました。ライプラインのない状態で二

# 津波と原発震災、 なんとかが一步步つ前に

館脇章宏（仙台市若林区在住）

男は顔面火傷と間違われるほどの皮膚炎にかかり、妻はストレスから嘔吐を始め、私も39度近い発熱が続きました。どうするべきか悩んでいる時、車一杯の救援物資を積んだ関西の知人が救出に来てくれました。

自分達だけ避難する事に罪悪

感を感じながらも、子どものこと、会社のこと、そして県外でもできることを考え、僕らは宮城県からの避難を決意しました。もちろん布団は避難所に届け、食料は自宅避難の皆さんに渡し、家は被災者の方に無料で使ってもらっています。

今、日本がやるべきことは何だろう。日本だから発信できることは何だろう。地震と津波は直接的に多くの被害者を出した。原発震災では多くの人が被曝し、放射能汚染を広め、これからも多くの人々を様々な形で苦しめることになるだろう。僕たちが

うけたこの苦しみを子どもたちに二度と体験させてはならない。そして、未来の世代まで影響を与え続ける原発や核燃施設を一日でも早く停止させなければならぬ。事故が起きてから止めても遅すぎる事は、誰もが理解したと

思う。自分たちの意思で原発を止めよう。きつと世界平和へ大きな一歩を踏み出したことになり。現在、福島原発の現場作業に携わるすべての人に心から感謝している。同じ過ちを繰り返さないことを誓い、新しい道を作っていく。

それにしても長い間揺れていた。3波にわたり、合計3分は揺れていただろう。一瞬にして職場の電気は消え、机にあったパソコンやプリンターはすべて投げ出され、ロッカーや工場のパレットの多くが倒れ、そして壁が大きな音をたてて崩れた。

「天津波警報が出ている」。ワシセグを見ていた誰かが叫んだ。すぐに岩手県大船渡市の実家の母に電話するが、当然のことながら繋がらない。ワシセグでは、名取市の浜が津波に飲み込まれているのが映し出されている。

翌日、なんとかガソリンを手に入れ実家へと向かうが、道路が寸断され途中までしかいけない。車で寝ること3晩、「若林

区」の沿岸で2000人の遺体発見。「福島原発が爆発」とカーラジオで聞いたときは、「これは夢なのか」と思った。

その後、4日目にやっと母が無事との連絡が入り、また次々と仲間の無事の情報があったのだが…。2月26日に仙台で行った「六ラプ東日本市民サミット」の若いスタッフや、弟さんとともに名取市の海辺で遺体で発見された。また、同じくスタッフの仲間のお父さんも気仙沼で行方不明だという。再処理工場の運動で知り合った三陸沿岸の多くの方が、家族や会社を失ってしまった。私の母の実家もあとかたもなく流されてしまった。

一方、福島原発による放射能から身を守るため、仙台からも関西方面などへ避難が始まった。中には新潟への大型バスをチャーターして、50人以上の人を避難させるなどすばやい行動をとった人もいた。

あれから一カ月が過ぎ、仙台ではやっと都市ガスも開通してライフラインは復旧しつつある。しかし、仙台も含め、岩手県から福島県の沿岸部ではまだこれから長い復興の道のりが続く。正直、沿岸部の人たちはまだ先が見えていないのが現実だ。

これまで三陸にかかわり、また放射能の問題にかかわってきた「わかめの会」も、徐々に体制を立て直して、三陸の復興と、福島原発の問題に取り組み始めようとしている。4月1日には、宮城県に対しヨウ素剤の配布準備と、放射能の測定を求めるところを柱とした緊急要望書を提出した。

今後の課題は、なんといつても三陸の生活の立て直しだと思えるので、そのために何ができるかを考え、動いていきたい。そしてみなさんにぜひお願いしたい。

## 東北へ支援物資を届ける

3月27日、埼玉県ふじみ野市から東北の被災地に向けて救援物資を積んだトラックが発出。届けるのは、NPO 上福岡障害者支援センター 21 事務局員の鈴木啓太郎さんとボランティア協議会の人々。初日に仙台のNPO 法人萌友 仙台（ホームレスの人たちへの宿所の提供や生活支援を行っている団体）、雲母倶楽部（きららくらぶ：障害者・介護施設・地域生活支援施設）、自立生活センター CIL たすけっと（障害者自立生活センター）へ支援物資を届けた。2日目は福島の福島県災害ボランティアセンターで、物資の運搬を手伝った。一般社団法人アクティオも現金 20 万円を義援金として寄付した。



仙台にて

① 今回の震災は規模が大きく、立ち直りには時間がかかるので、長い目で支援をお願いしたい。  
② 火力発電所やいろんなプラントが被災したなかで、原発だけが巨大な被害を広範囲かつ世代をこえて生み出しており、しかもまだまだ収束していない。このような超巨大リスクをかかえたプラントを動かすことは、社会的にも倫理的にも認められないことを、訴えてほしい。